南国忌の会会報

平成27年2月1日

No. 32

発行所
南国忌の会
横浜市金沢区富岡町
3-23-21　長昌寺内
電話　045-771-6970

特別講演
「黄色い牙」の原風景
～耳に残る母の読み聞かせの声～

第八十三回直木賞受賞

志茂田　景樹

皆さん、こんにちは。改めまして、志茂田景樹でございます。

文学の縁というのは何か面白いと思います。これまで自分にかかわったことで振り返ってみると興味深い糸で結ばれているのではないかなという気がいたします。

講演する志茂田景樹氏（長昌寺）

◇気仙沼大島への慰問

僕はあの3・11以降、講演や読み聞かせ会、イベントとは別に東北地方を年数回慰問しています。今年も既に二回慰問しました。一昨年二月には気仙沼大島に行ってきました。震災の年の十二月、その島でお話しの会をしている人からこんな依頼がありました。

「私は気仙沼の大島というところでお話しの会をやっている者ですが、私の生まれ育った大島も津波の被害に見舞われて犠牲者も二十七人出ております。でも漸くこの冬になって私たち島の人間もこれから力強く復興していかなければいけないという気持ちになれたところです。皆を励ます意味でどうか私たちの島に来ていただけませんか。」という内容でした。

もちろん即答で承諾しましたが気仙沼に大島という島があることは知りませんでした。そこであわてて日本地図をみると、なるほど気仙沼のところにややいびつな円に近いような島が描かれています。どんな島かなと思ってネットで調べてみたんですが、最盛期は八千人の人口でほとんどが漁業に関わっている人たちであるとありました。さらに、この島ではいろんな魚が水揚げされるが、特に鰯は大ぶりでとても味が良いと評判である、そしてこの大島は緑の真珠と呼ばれているとのことでした。

◇幼き日の文学との出会い

緑の真珠という言葉をその大島に捧げた詩人で童話作家がいるんです。捧げた言葉を言いますと「海は命の源、波は命の輝き。大島よ、永遠に緑の真珠たれ。」この島に生まれ、島の大島小学校を卒業した詩人兼童話作家が自分の生まれ故郷に捧げた言葉なんです。緑の真珠とはいい言葉だなと思い、そう言った人はいったい誰だろうと調べて、名前を見たとき僕は「ええっ」と叫んでいました。

その詩人兼童話作家は水上不二という名前でした。一般的には限りなく無名に近い人です。でも、僕にとっては小学五年の時から心に焼き付いている名前でした。

僕は静岡県伊豆の宇佐美村、いまの伊東市の浜辺の出身で、実家は半漁半農のみかん栽培農家でした。父は国鉄の職員で僕が五歳の時に東京方面に転勤になり、その後数ヵ所国鉄の官舎を移り住みましたが、その時は東京都下の小金井町、いまの小金井市でした。小学五年の時、水上怜子という女の子が僕のクラスに転校してきま

した。大柄で物静かな女の子で、休憩時間になると必ず何かの本を広げてじっと読んでいました。

ある時担任の先生が、怜子ちゃんのお父さんってものを書いているんだよね、と言いました。その時僕にはピンと来るものがあったんです。何故かといいますと、その年光文社から「少年」という雑誌が創刊されたんですが、僕は創刊号から購読していました。新しい号を手にするとまず三十ページ前後のところを開きます。その辺りのページには横長の長方形のコラムで詩が連載されていました。それはいつも海に因む詩でした。白い砂浜、美しい貝殻、かもめ、ヨット、磯の松。そういうものが必ず詩に出ていて、海辺で生まれた僕にはとても懐かしく毎月いの一番でその詩を読んでいました。担任の先生が怜子ちゃんのお父さんってものを書いているんだよね、と言った時に僕は、お父さんとは「少年」に連載している詩人ではないかとピンと来たんです。水上不二という人なんですね。

翌日一番新しい号の詩のページを開けて彼女に「これ、怜子ちゃんのお父さんなんだね。」と聞いたら、怜子ちゃんは何も言わず大きく肯いていました。先ほど、「緑の真珠」という美しい異名を自分の生まれ故郷に捧げた詩人兼童話作家が水上不二と知った時に僕が思わず叫び声をあげたと言いましたが、その理由を納得していただけると思います。

◇詩人水上不二との縁の糸

慰問から帰って水上不二さんの著作を調べました。どんな大きな本屋に行ってもありません。絶版で置かれておらず、国会図書館にも二冊しかありませんでした。僕は「少年」に乗っていたあの詩が読みたくて、その二冊を隅々まで読みました。でも「少年」に載っていた詩らしきものは見つかりませんでした。その代り、僕の心を打った詩とめぐり合うことができました。とても良い詩だと思います。「いわし」というタイトルです。

いわし、いわし、いわし
急いで行け　青い海を急いで行け
たった一匹残されて　生簀の中
で泳いでいるいわしを僕は助けてやった
波が明るく歌ってる生簀の外の
青い海
いわしに自由を与えてやった
いわしはそれがうれしくて
僕に礼を言ったのだろう
体を振って生き生きと
しばらく海を渡って行った
お父さんが沖で待っている
お母さんが沖で待っている
いかやかつおに見つかるな
かつおやいかに食われるな
僕は祈った　いわしのために
幸せな旅を　幸せを
いわし　いわし　泳いで行け
青い海を急いで行け

以上ですけれどもこの一匹残されたいわしの境遇を何か自分に重ねたところがあります。

僕は実年齢七十三です。でも二千年三月二十五日に新ゼロ歳として目を覚ましましたのでただいま新十三歳です。ですからけっこう大きな望みを持ってます。大きな目標も掲げています。この「いわし」についても、大きな海を泳いで行っていろいろな苦難が待っているかもしれませんが、生簀の中で一匹泳いでいる時からみれば大きな希望を抱き、胸を膨らませて新しい何かを目指そうとする、そのようないわしに自分を重ねていました。水上不二という人の詩に心ひかれたことによって生まれた縁の糸というのは一生続くのではないか、という気がいたします。

◇雑木林の慄き

先ほど父が国鉄職員で官舎を何軒か移り住んだと言いました。小学校に入る前、住んでいた官舎は埼玉県の比企丘陵の山の麓にありました。そこに四歳から六歳になる直前までいましたが、それまでは街中の官舎でした。だから随分田舎に来たなと感じました。

ある夕暮、僕は一人で庭の外に出て官舎の裏の雑木林に入って行ったんですが、途中でなぜかすごく怖くなりました。夕暮れで暗くなり、山の精霊というか、何かそういうちょっと違うものを感じて怖くなって雑木林の中の近道を一生懸命急いで官舎に戻った記憶があります。海辺育ちの僕が後になぜ「黄色い牙」という秋田の山地の話を書くに至ったのか、きっかけになるようなものがここにもあったのではないかと思います。

◇兄の出征

僕は末っ子で健在の姉が二人います。下の姉とは八歳違いです。間に五歳違いの姉がいましたが、腸ねん転になった時、手遅れで亡くなっています。

実は一番上に十五歳離れた兄がいました。この兄が大蔵省税務講習所、いまの税務大学校を卒業し、渋谷の区役所に奉職しましたが、二カ月後に赤紙が来ました。召集令状です。二十歳になったばかりでした。官舎の人たちが兄のために壮行会をやってくれました。

印象に残っている光景は廊下で母が兄の背中を一生懸命さすっている姿です。兄は廊下から庭にゲーゲーやっていました。母が何か言っているんですがよく聞こえませんでした。聞こえなかったのか、聞いても意味がよくわからなかったのかはっきりしませんが、後で思うに母親だったら「何があっても帰ってきてちょうだいね。」と言ったのではないでしょうか。

その数日後最寄りの駅まで父とその部下たちとが襷をかけた兄を送って行きました。官舎の前は雑木林と麦畑で、その麦畑の道をしばらく歩いてから何気なく官舎の方を振り返ると母が木戸口から顔を出して見送っているんですね。でも僕が見たとたんにすっと顔を隠しました。なぜ隠したのかわかりませんがとても印象的でした。

駅に着いて列車に兄が乗り、ホームに残った人たちが万歳を三唱しました。窓のガラス越しに兄がこっちを見ていて僕と一瞬目が合った時、その目は澄んでるようで寂しい目だったのを記憶しています。

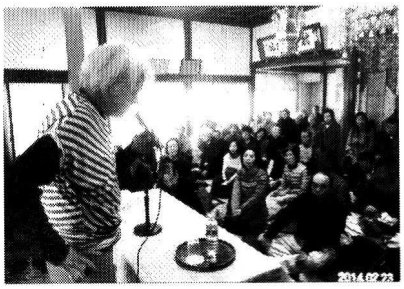
◇兄の死と部屋の匂い

兄は旧満州でソ満国境近くに駐屯していたんですが、昭和二十年

八月七日ソ連軍が日ソ不可侵条約を破って国境を越えてきました。

八月十五日の終戦は部隊に無線がありますから兄の部隊は知ったでしょう。でも終戦は知っても降伏はできません。上級司令部から、降伏して武装解除せよとの命令がなければ当時の日本軍は降伏できなかったんです。日本は八月十五日にポツダム宣言を受諾しましたが、生きて虜囚になるべからずという根本の掟があったから兄たちは降伏できずソ連軍の総攻撃で全滅したそうです。でも戦死したという確証がなかったため終戦後も行方不明者扱いでした。昭和二十七年になり、連隊の生き残りが二名戻ってきたので初めて兄の部隊の様子が知れて当時の厚生省が戦死と認定、戦死広報が出ました。

官舎にある三畳の間は兄の部屋でした。座り机と観音開きの本棚がありました。兄が兵隊にとられる前のことはよく知りません。でもその後僕は兄の三畳間に入るのを日課にしていました。座り机の上に二十歳の時の兄の写真立てが飾ってあっていつも母が陰前を供えていました。本棚は下が引出しになっていて開けると何か兄の匂いがすぐ漂ってきました。


講演風景

兄は当時の文学青年で詩も好きでした。石川啄木、北原白秋が好きだったんでしょう。外国の詩人の詩集もありました。ハイネとかゲーテの詩集を取り出すとページの余白に自作の短歌なんかが書いてありました。押し花とか栞とか挟まっているものが出てきて、その栞の裏にも崩し字で短歌が書いてありました。押し花だの栞だのがぱらりと落ち、拾っていじったりしていると何か兄と話をしている気がしてきたものです。兄の三畳の部屋というのは僕にとって憩いの場だったんです。

小学校を卒業し、父も国鉄を早期退職してその子会社に移る頃、その日も学校から帰って官舎の兄の部屋に入りました。そしたら母が正座して泣いているんですね。僕の母は気丈で後にも先にも泣くのを見たのはその時だけでした。なぜ泣いたのか。役場から兄の戦死広報が届いて泣いたんですね。

それからまもなく武蔵野市に新居ができて官舎生活とはお別れすることになりましたが、約六年にわたって兄の部屋に日課のように入っていたことがきっと僕にとって文学への道を志ざさせる大きな要因になったんだろうと思います。さっき話した水上不二さんもきっと大きな要因だったでしょう。

◇サラリーマン遍歴

僕は中央大学を二年留年して昭和四十年に卒業しております。当時留年しますと今と違って就職の学内選考でまずはねつけられる場合があり、僕もその選考であまり良いところは紹介してもらえませんでした。それだったら自分で探した方がよいと考えてやりましたが、職を転々ということになりました。職の内容では二十種類以上転々としました。二、三日で嫌になり、行くのをやめたところを含めると多分三十種類以上になったと思います。

新宿区大京町に別荘分譲で大当たりした会社があり、面接を受けたら即決で翌日から出社ということになりました。

はじめは営業畑ばかりでした。僕は性格は穏やかですが、人に頭を下げるのは嫌いなんです。大した会社ではないし、そんなところで作っている製品に良いものはありません。こんな製品買う人いるのかなと思いながらセールスしていて売れると思いますか。どこ行っても売れません。それでいよいよ営業は向いてないなと思いました。

◇文学への志の芽生え

その後は市場調査の会社や保険調査の会社を経験しました。

保険の調査会社時代、月の三分の一は出張で案件を五～六件持って出かけましたが、当時遠くは夜行で行って夜行で帰る行程だったので移動時間はたっぷりありました。日本はどんな辺鄙な所に行っても必ず宿屋がありました。富山の薬売り等行商人向けです。そういう宿に泊まるとやることがないんですね。仕方がないから小説を読みました。大衆小説、中間小説、純文学、また小説雑誌、文芸雑誌であるかを問わず、何でも手当たり次第に読みました。出張中読んだ本や雑誌は駅前の古本屋で売り、その金でまた新刊本を買う繰り返しでした。そうした中で新人賞受賞の作品も読みましたが、この程度だったら僕も書けるのではないかとも感じました。僕の方がずっと面白い経験をしていると思って、二十七歳の頃に作家志望が芽生えました。それがはっきりした志望になったのは二十八歳の時、富山の出張から帰る夜行列車の中ですさまじい腹痛に襲われたのがきっかけです。

◇入院から小説家へ

ボストンバッグの中に富山駅で買ったウィスキーのポケット瓶があるのを思い出し、薬をもすがる気持ちでラッパ飲みしたら少し痛みが和らぎました。そのまま寝て起きたら上野駅で、真っ直ぐ家に帰りました。その日は会社に行かず、家にいたところ、夜になってまた痛み出しました。近くの救急指定病院が空いていてすぐ受け入れてくれました。

手術後三日間も四十度の熱が下がらず、翌日も続いたらお陀仏だったらしいですが、その一日でガーンと下がりました。熱が下がったんだからいつ退院できるか聞くと、「まあまあ」あわてず、ここはじっくり養生なさい」と院長に言われました。その言葉に騙され、ぴんぴんしていたのに一ヵ月ほど入院していました。

ぴんぴんしていましたから何か書こうと女房に原稿用紙を持ってきてもらい、初めて小説らしきものを書きました。それを「オール読物」に応募したら二次予選を通りました。二次予選を通るなら何年かやればものになるなと思って応募を続けたところ、七年目三十六歳で新人賞を取りました。それから一年足らずで小説家専業になりました。出すものが割りとヒットして評判が良かったのでやって行けると思いましたが、ちょうどそのころ父が病気になりました。

◇父の思い

父は国鉄をやめてから外郭会社の工事会社に入り、辺鄙なところでの隧道や橋梁工事に従事していましたが、北海道に長くいた頃中学生の僕に手紙と写真を送ってきたことがありました。父が真ん中にどっかり胡坐をかき、両側に猟銃を持った人が十数人並んでいてその背後の大木の枝には大きなヒグマが吊るされている記念写真で

した。その年の暮に父が帰ってきて言いました。

「お父さんがいる現場は隧道工事をやっているから山奥にあってその辺りの現地採用の人が主に働いているんだよ。ヒグマが出たとなるとその人たちは家に帰っちゃうんだ。山の麓に住んでいるその人たちは家に帰れば皆猟銃がある。それを取って来て狩猟団を組んで山に入ってしまい、仕事にならなくなる。お父さんも一緒に付いて行ったらたまたまヒグマの大物を仕留めるのを見た。これをお前に見せたい、写真に撮って送ってやろうと写したのがこの写真だ。」

僕はその写真が好きでした。その写真を見て、全く仕事に関係ないにも拘らず、父がどのようなところでどんな思いをして仕事をしているかがはっきりわかりました。

しばらくは机の引き出しに入れてよく取り出しては見ていました。

◇父に捧げる「黄色い牙」

その父が悠々自適の年金生活に入ってからのことです。トイレに行ってなかなか出てこない、痩せてくる、そして顔色も悪くなって来ました。検査入院となり、結果が出て行ってみると、主治医は「直腸がんで肝臓や肺にも転移しています。あと三ヵ月でしょう。」と説明してくれました。家で待っている母に何と言おうかと考えながら、何か重苦しい思いで家の前まで帰って来たのを覚えています。その時門を入る前に頭に浮かんだのが先ほどお話しした写真でした。そして父に捧げるというのはおこがましい言い方ですが、今ヒットしているシリーズとは別のものを書こうと思いました。出世に縁がなく、馬鹿正直なくらい真っ直ぐで、人情味ある父のような性格の人を主人公にして北海道の熊打ちの小説を書こうかなと思いましたが、北海道の熊打ちの資料がなかったので秋田の山中のマタギの棟梁に父を託して書き始めたのが「黄色い牙」でした。以前マタギの集落を訪ねたことと中学時代父が初めて送ってくれた写真の二つがモチーフになって生まれたのがこの作品で、自分でも一番好きです。

この主人公は最後に宿敵の大熊と格闘をしますが、死んだともどうなったとも書かなかったのは、いずれ続編を書こうかなという思いもあったためで、格闘場面で終えました。今日こういう話をしていると続編を書こうかなという気持ちになってきました。時代も環境も大分変っていますが、そういうものを取り入れたらまた新しい「黄色い牙」が書けるのではと思います。これもまた新十三歳の目標の一つとして考え始めているところです。

◇私の原点～母の読み聞かせ

僕が三歳の頃に母が読み聞かせしてくれたその声が今でも頭の中に刻まれています。よく読んでくれたのが「三匹の仔豚」と「赤い靴」だったのが後になってわかりました。「三匹の仔豚」はいつも僕がせがんでこれ読んでと渡したようです。「赤い靴」は母が好きなアンデルセンの童話でした。こちらは三、四歳の子にとってとても恐ろしく、怖い場面がありました。でも最後には怖さが消えて浄化されるような感じがしましたが、これは物語の結末がとても純粋といえるような終わり方なので、すべて昇華されれたからなのかなとも感じます。

「三匹の仔豚」の方は三匹の兄弟が力を合わせていくのが子供心にいいなあと思っていたんでしょう。たった一人の兄を亡くし、あと女兄弟ばかりでしたから「三匹の仔豚」は自分自身の心に残っていた物語なんだと思います。

そうした読み聞かせは、後になって母に聞いたところでは、読み聞かせているうち僕が寝たのでしめたと思って台所に立つとすぐ目を覚まして泣き出すため、それからは読んでいる途中で眠っても最後まであなたに読み聞かせたのよ、とのことでした。時間があるともう一冊あなたに読み聞かせたのよと言ったこともありました。でも、そう言ったところをみると母は実は自分のために読み聞かせしていたのではないかな、と思います。

僕もたまに一人の時声を出して読むんですが、とても心が安らぎます。一人で誰もいない時は絵本でも古典でも新刊本でもいいですから自分のための読み聞かせをするとへこんだ心も、何かに怒っている心も落ち着いてきます。皆さんも是非好きな本で一度自分に読み聞かせをしてみてください。

少し脱線して本筋の話が少なくなったようにも思いますがご容赦願います。

【お断り】

当稿は、二〇一四年二月二十三日、長昌寺で行われた講演の要旨を整理したもので、文責は編集部にあります。